



目次

在独 PI ネットワークの紹介	2
センター活動報告	3
第 15 回日独学術コロキウムを開催	3
Opening Trautz exhibition Uni Bonn に参加 ..	4
ウィーン大学にてプロモーションイベントを開催	4
中東欧日本研究ネットワークミーティングに参加 ..	5
天理大学サテライトオフィスオープニングセレモニー に参加	5
筑波大学学生がボンオフィスを訪問	5
2019 年ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞 式典に参加	6
Tokyo Tech ANNEX Aachen オープニングセレモ ニーに参加	6
小平先生（前センター長）ご夫妻への感謝の 集い	7
2019 年度イベント予定	7
センター長コラム	8
センターからのお知らせ	9
国際協力員帰任のご挨拶	9
4 月からの国際協力員紹介	9
ドイツ学術ニュース	10

在独 PI ネットワークの紹介

ドイツ国内で研究室主宰者（Principal Investigator, PI）として働く日本人研究者のネットワーク「在独 PI ネットワーク」について、ドイツリウマチ研究センター 常世田好司先生に寄稿いただきました。

2017 年 2 月にドイツで研究室を主宰する日本人研究者のネットワークを立ち上げました。現在、生命科学系が 16 名、化学系 6 名、物理学系 7 名の合計 29 名から構成されており、ドイツ国内の多くの日本人研究室主宰者が含まれております。

私たちネットワークの主な目的は、1) 共同研究の促進と新学術領域の創造、2) 人材確保、3) 情報共有、4) 社会への貢献の 4 つになります。日独を軸に国際共同研究の推進や研究費の獲得などに積極的に取り組むことが主な活動内容となります。

本ネットワークでは、異分野融合や新分野構築のために、分野が異なるからこそ、直接会いお互いの研究を議論し合うことが最善であると考えております。既に第 1 回ミーティングを 2017 年 4 月にミュンヘンにて、第 2、3 回ミーティングを 2018 年 1 月、4 月にベルリンにて開催しており、活発なディスカッションが行われました。その際、研究に関するディスカッションだけではなく、ドイツにおける人材確保や予算獲得のための情報を共有したり、また文部科学省関係者と日独の研究環境の相違点などの意見を交わしました。



第 3 回ミーティングの際、ベルリンの在独大使館ホールにてサイエンスシンポジウムを同時に開催しました。写真は化学実験に興味を持つベルリン在住の小中学生。

このネットワークでは社会貢献として、ドイツ各地の日本人学校や日本語補習校で日本人小中学生を対象に授業やシンポジウムを行い科学の面白さを伝えることも行っております（写真）。さらにドイツの研究環境を広く知って頂き、多くの日本人がドイツに留学するきっかけになるようにと、多くのコラムを在独大使館や日本フンボルト財団のホームページに発信しております。

在ドイツ日本国大使館ホームページ：

<https://www.de.emb-japan.go.jp/nihongo/kagi/network.html>

（在独 PI ネットワーク世話人代表・常世田好司）



センター活動報告

第 15 回日独学術コロキウムを開催

日時：2019 年 2 月 7 日（木）～8 日（金）

場所：Harnack-Haus – The conference Venue of the Max Planck Society（ベルリン）

本センターは、2019 年 2 月 7 日～8 日にかけて、ベルリン自由大学、金沢大学との共催により、第 15 回日独学術コロキウムを開催しました。本コロキウムは、先端的科学分野のテーマを選定し、若手研究者を含む日独双方の専門家による研究発表と討論を行う小研究会です。第 15 回目となる今回は「Nano-LifeScience」をテーマに、日独の研究者約 30 名が参加しました。日本からは、金沢大学の安藤敏夫特任教授、華山力成教授、大阪大学の原田慶恵教授、理化学研究所/東京大学の岡田康志教授、大阪大学/理化学研究所の上田昌宏教授、東北大学の八尾寛教授が講演者として参加しました。

7 日のオープニングでは、日独双方のオーガナイザーであるベルリン自由大学の Joachim Heberle 教授および Petra Knaus 教授、金沢大学の安藤特任教授の 3 名から挨拶があり、引き続き、ベルリン自由大学の Verena Blechinger-Talcott 副学長から、日独研究者交流に対する本コロキウムへの期待が述べられました。その後は、日独双方の研究者がそれぞれの研究内容を発表し、議論を行う形で進行了。研究発表は 4 つのセッションに分けられ、各日 2 つのセッションが行われました。各セッションでは、各発表者から専門的な内容の研究発表がなされ、それに続いて質疑応答が行われました。昼食後は、Scientific Dahlem campus tour が行われ、ベルリン自由大学周辺を散策しました。カイザー・ヴィルヘルム学術振興協会から続く、ベルリン・ダーレム地区の歴史に耳を傾けつつ、アルベルト・アインシュタイン、オットー・ハーンをはじめとする著名な科学者にちなんだ建物等を見学し、参加者たちは興味深い様子で見入っていました。午後のポスターセッションでは、ベルリン自由大学をはじめとする大学・研究機関の若手研究者が約 10 名参加し、よりカジュアルな形式で交流が行われました。

8 日は、前日に引き続き、日独双方の研究者による発表と議論が行われました。昼食休憩を挟んで、2 つのセッションを終えた後、全体のまとめとしてドイツ側オーガナイザー、および林正彦センター長から、本コロキウムに対する講評および感謝の言葉が述べられました。終了後、日本側参加者の交流夕食会が行われました。日本側参加者からは、ドイツ側だけでなく日本側の研究者とも知り合える貴重なネットワーキングの機会となったとのフィードバックを得ることができました。

なお、前日の 6 日夜は、翌日から始まるコロキウムに向けて、Scientific networking meeting/get together として、日独のオーガナイザー、講演者をはじめとする研究者同士の交流が行われました。また、コロキウム終了後、翌日 9 日には、希望者を対象とした、ベルリン自由大学物理学部研究室ツアーが行われました。



Blechinger-Talcott
副学長



Heberle 教授



Knaus 教授



安藤特任教授



華山教授



八尾教授



講演の様子



ポスターセッションの様子



Scientific Dahlem campus tour の様子

ベルリン自由大学の紹介



<https://www.fu-berlin.de/en/sites/inu/excellence-strategy/proposals/index.html> (2019 年 1 月 14 日閲覧)

ベルリン自由大学は、1948 年に東ベルリンのフンボルト大学から教員と学生が分離する形で西ベルリンに設立された総合大学です。2019 年 1 月に開始したエクセレンス・クラスターでは 4 件採択され、ドイツでもトップクラスの大学となっています。

ドイツの首都ベルリンの中心部から電車で 40 分程度、南西部のダールムに位置する近代的なキャンパスは、緑が豊かで、都市部とは異なった落ち着いた雰囲気です。

Opening Trautz exhibition Uni Bonn に参加

日時：2019 年 1 月 9 日（水）

場所：ボン大学（Universität Bonn）

参加者：林センター長

1 月 9 日、ボン大学博物館でトラウツ・コレクションの企画展示が始まった。フリードリッヒ・トラウツ（1877-1952）は日本研究者で、1930 年代には京都ドイツ研究所長として日本に滞在し

た。トラウツが集めた幕末から昭和初期にかけてのコレクションは数千点に及び、自ら撮影した写真や 16 ミリ映画なども含まれている。これらはボン大学に所蔵されていたが、10 年ほど前にその存在が明るみに出て、このたび一般公開となった。江戸時代の和紙や明治時代のポスターなど、思わず顔を近づけて見入ってしまう。樺太や宮古島で撮影した映画も残されており、見ているとなつかしさがこみ上げてくる。（林センター長）

ウィーン大学にてプロモーションイベントを開催

日時：2019 年 1 月 30 日（水）

場所：オーストリア・ウィーン

参加者：林センター長、出口副センター長、
Schulze 現地職員

1 月 30 日（水）にウィーン大学において本会国際交流事業のプロモーションイベントを開催しました。まず、出口副センター長及び Schulze 現地職員から本会の外国人研究者招へい事業及び二国間交流事業についてのプレゼンテーションを行い、引き続き、元フェローでドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会のウィーン代表である Eberhard Widmann 氏から、外国人研究者招へい事業で日本に研究滞在した際の経験談についての発表がありました。学生や研究者など 15 名ほどの参加があり、質疑応答の時間には参加者から活発な質問があった他、本会のオーストリアの対応機関であるオーストリア学術交流協会の担当者も出席しており、参加者に対してその場で推薦機関としての情報提供を行うなど、有意義な機会となりました。



Eberhard Widmann 氏



出口副センター長

中東欧日本研究ネットワークミーティングに参加

日時：2019 年 2 月 2 日（土）～3 日（日）

場所：ハンガリー・ブダペスト

参加者：出口副センター長

2 月 2 日（土）及び 3 日（日）の 2 日間、国際交流基金ブダペストセンター企画による中東欧日本研究ネットワークミーティングが開催され、ボンセンターから出口副センター長が出席しました。これは、中東欧における日本学の現状と課題の共有を行うことを目的とした行事で、中東欧の日本学課程を有する代表的な大学の学科長等が集まるとともに、中東欧と関係が深い英国のイースト・アングリア大学及び日本から神戸大学の教員が出席しました。出口副センター長からは、本会の外国人研究者招へい事業や二国間交流事業等の国際交流事業の紹介

を行いました。東欧の担当国への訪問は、ドイツ語圏内に比べてどうしても頻度が少なくなっていますが、この行事に参加したことにより、開催国のハンガリーの他、ポーランド・チェコ・ルーマニア・クロアチア・スロベニア・セルビア等からの日本学研究者に本会の事業を詳しく紹介することができ、非常に有意義な機会となりました。



会場の様子

天理大学サテライトオフィスオープニングセレモニーに参加

日時：2019 年 2 月 12 日（火）

場所：ケルン市・天理日独文化工房内

参加者：出口副センター長

ケルン市にある天理日独文化工房内に天理大学サテライトオフィスが開館し、そのオープニングセレモニーにボンセンターから出口副センター長が出席しました。天理大学からは、岡田副学長とはじめとした関係教職員が、ドイツ側からはケルン大学及びマー

ルブルク大学の関係者やケルン独日協会等から、日本側からはデュッセルドルフ首席領事やケルン日本文化会館及び当センターから出席しました。天理大学は、ドイツにおいてはケルン大学のおよびマルブルク大学と大学間交流協定を締結しており、今後学生交流を中心とした日独交流の更なる発展のため、サテライトオフィスが果たす役割も大きくなるものと考えられます。ボンセンターの位置するノルトライン・ヴェストファーレン州には日本の学術機関の海外オフィスが複数あり、情報交換やイベント時の協力など普段から交流がありますが、その輪が今後さらに広がることも期待されます。

筑波大学学生がボンオフィスを訪問

日時：2019 年 2 月 14 日（木）

場所：ボン研究連絡センター

対応者：林センター長、出口副センター長

ボン大学、デュッセルドルフ大学に留学中の筑波大学学生、および日本留学経験のあるボン大学の学生、征矢 筑波大学ボンオフィス駐在員の計 6 名がボンセンターを訪問しました。今回の訪問は、主としてドイツ留学中の筑波大学学生に、筑波大学および JSPS のボンのオフィスを知ってもらうことを目的とした、初めての試みでした。ボンセンターは筑波大学ボンオフィスと同じ建物にあります。今回の訪問について、当初、筑波大学ボンオフィスの相澤所長から林センター長に提案があり、ボンセンターもこれに協力する形で実施しました。

当日は、出口副センター長からボンセンターの概要について説明があった後、林センター長から天文学についての講話がありまし

た。学生たちは皆真剣に聞き入っており、林センター長の講話にはその後も多くの質問が上がりました。学生からは、ボンに筑波大学および JSPS のオフィスがあることは初めて知ったため面白かった、林センター長の宇宙についての講話は興味深かった、等のフィードバックが得られました。

来年度以降も、このような機会があれば、ボンセンターとしても積極的に協力したいと考えています。



林センター長の講話の様子

2019 年ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞

式典に参加

日時：2019 年 3 月 13 日（水）

場所：ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー

参加者：林センター長

ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞の受賞式典が、3 月 13 日にベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーにて開催され、ボンセンターからはセンター長が出席した。この賞は 1985 年に設立され、ドイツ研究振興協会（DFG）の最も重要な賞となっている。優れた業績を挙げている若手研究者が毎年 10 人（組）選ばれ、一人（組）あたり最大で 250 万ユーロ（3.1 億円）の研究費が授与される。研究費は最大 7 年にわたって自由に使える。

将来性のある優秀な研究者に、「競争的研究費獲得などの手間をかけさせずに研究に集中してもらう」ことを目的のひとつとしている。（林センター長）

今年の受賞者は以下に紹介されている。

https://www.dfg.de/en/funded_projects/prizewinners/leibniz_prize/2019/index.jsp



↑ Peter Strohschneider 会長

登壇者及び受賞者たち

© DFG / David Ausserhofer ↓



Tokyo Tech ANNEX Aachen オープニングセレモニーに参加

日時：2019 年 3 月 22 日（金）

場所：アーヘン工科大学（RWTH Aachen University）

参加者：林センター長、田畑国際協力員

東京工業大学がアーヘン工科大学との連携のもと、「Tokyo Tech ANNEX Aachen」をドイツ・アーヘン市に開設し、そのオープニングセレモニーに、ボンセンターから林センター長、田畑国際協力員が出席しました。

東京工業大学は 2007 年にアーヘン工科大学と全学協定を締結し、研究者・学生交流、共同ワークショップやシンポジウムの開催を重ね、交流を深めてきました。Tokyo Tech ANNEX Aachen は、2018 年 3 月に開設されたバンコクに次ぐ、ANNEX 第二号であり、同学初の欧州拠点となります。

オープニングセレモニーでは、益一哉 東京工業大学学長、Prof. Dr. Ulrich Rüdiger アーヘン工科大学学長の挨拶に続き、パネルディスカッションが行われました。ドイツ側パネリストは、ノルトライン＝ヴェストファーレン州政府、アーヘン市、ドイツ学術振興会、日本側パネリストは在デュッセルドルフ日本総領事館、ジェトロ・デュッセルドルフ事務所、ボンセンターで、ANNEX の活動への期待が述べられました。その後、東京工業大学・アーヘン工科大学双方の研究者による基調講演が行われました。会の最後に

は、東京工業大学・アーヘン工科大学合同学生カルテットがカーボンファイバー楽器による弦楽四重奏を披露しました。また、オープニングセレモニーに先立ち、2018 年度卓越大学院プログラムに採択された「物質・情報卓越教育院」の説明が行われました。

ANNEX の開設により、ドイツのみならず、近隣諸国を含めた欧州における国際連携活動がさらに活発になることが期待されます。



会場に掲げられた日独の国旗



パネルディスカッションの様子

小平先生（前センター長）ご夫妻への感謝の集い

日時：2019 年 1 月 26 日（土）

場所：東京

参加者：ボンセンターの過去の副センター長、国際協力員等計 27 名

2019 年 1 月 26 日（土）、東京都内のレストランにて「小平先生ご夫妻への感謝の集い」が行われました。小平先生がセンター長としてのご在任中 2008 年 7 月～2018 年 9 月までの 10 年間で、副センター長 5 名と国際協力員 19 名の計 24 名の職員が大学等から派遣されましたが、当日は、全国各地からそのご家族を含めて 27 名が駆け付けました。

小平先生の学術交流に対する姿勢・熱意、その経験と知見の広さ・深さは当然のこと、スタッフに対する細やかな配慮や温かな心配り、そしてウタ夫人との愉快的な掛け合い？に、我々職員は業務に追われながらも充実した日々をボンで過ごすことができました。特に家族帯同者はウタ夫人からのお力添えにも日々助けられたと思います。小平先生に惹かれ、日を追うごとに尊敬の念を強くし、先生とご一緒することができた幸運を帰国後に改めて噛みしめていたわけです。そのような想いを直接、感謝の言葉でお伝えしたいと、集いでは各参加者が持ち寄った沢山の思い出話に花が咲き、貴重な経験や失敗談などで大いに盛り上がりました。小平先生からは「事務の皆さんの協力でセンターの活動を存分に行うことができました。今日をきっかけに同じ釜の飯を食べた仲間として皆さんが今後協力していくことも期待します。」とお言葉をいただき、2 時間の会合はそれこそあっという間に過ぎ去ってしまいました。

JSPS 同窓会が最初に立ち上がったのはドイツですし、また、小平先生のご発案で設立された JANET（欧州に拠点を置く日本の大学の緩やかなネットワーク）にも見習い、我々ボンセンター同窓生も色々な場面で互いに協力していければと思います。

この紙面をお借りして、改めまして小平桂一先生とウタ夫人に感謝するとともに、会合運営にご協力いただいたセンター同窓生の方々に御礼申し上げます。

宮元博央（発起人／2008.7～2010.7 副センター長）



集合写真



記念品を受取る小平先生ご夫妻



思い出話披露中

2019 年度イベント予定

5 月 10 日（金）	サマープログラムオリエンテーション（ボン）
5 月 24 日（金）～25 日（土）	第 24 回日独学術シンポジウム（ウィーン・オーストリア）
6 月 14 日（金）	平成 31 年度採用海外特別研究員オリエンテーションおよびキャリアフォーラム（ボン）
9 月 9 日（月）	日本人研究者ネットワーク (JR-Net) 連絡会議（ボン）
	JSPS Abend（ボン）
11 月 1 日（金）～2 日（土）	会員による会員の招待 (MIMe)（リューベック）
11 月 2 日（土）	第 7 回ジュニアフォーラム（リューベック）
11 月 4 日（月）～6 日（水）	JANET-FORUM 2019（ロンドン・英国）
12 月 9 日（月）～10 日（火）	第 16 回日独学術コロキウム（ハンブルク）



センター長コラム

早いものでボンに来て半年が経過した。

まだまだ分からないことばかりである。

11 月にはリヨンで JANET フォーラムがあった。JANET とは、欧州に拠点をもつ、あるいは欧州で活動する約 30 の日本の大学・研究機関等の「緩やかな」ネットワークである。これらの拠点は、それぞれが日本の大学本部からの要請にもとづいて活動を行なっているので、拠点間の連携はあまりない。そのためフォーラムは、拠点にいる職員たちが知り合い、情報交換をする良い機会となっている。今年は GDPR（EU 一般データ保護規則）に関する講演があって好評だったが、これも各拠点が本部からの要請に応じて独立に調査していたのでは限度がある。なるほど JANET は重要な役割を担っているのかと、だんだん分かってきた。

2 月はふたりの国際協力員が「海外実務研修報告書」を提出する時期だった。日常の仕事に加えて長文のレポートを書かねばならないので、なかなかたいへんそうだ。

先に原稿が完成した菊池さんは、留学のしやすさを考えるというテーマに臨んだ。留学経験をもつ日独の学生 5 人にインタビューした結果、留学生在が留学しやすいと考える重要な要因は、留学先で友人を作ることだった。これはもっともな結果だろう。そのため多くの大学では、留学生の相談相手となれるよう同年代の学生をあてがう制度を設けている。ただ、あてがわれた学生が、留学生在が頼れる友人になれない場合もあり、制度を作っただけで良しとする単純な話ではなさそうだ。

もうひとりの田畑さんは、奨学金受給者への同窓会（アルムナイ）活動がテーマである。フンボルト財団（AvH）やドイツ学術交流会（DAAD）等では、ひとたび個人が奨学金を受けると、その人は自動的に同窓生となり、資金提供機関との結びつきが生涯にわたって続く。学振にも概ね海外研究連絡センターに対応した同窓会があり、重要な役割を果たしている。しかし、学振からの支援は各同窓会を経由して個人にたどりつくしくみとなっているため、学振本体と研究者個人との結びつきが薄くなってしまう傾向があるようだ。

林 正彦



センターからのお知らせ

国際協力員帰任のご挨拶

着任の際は気が遠くなるほど先に感じた、帰任の 때가近づいてきました。振り返ると1年という期間は本当に短く、今ならばもっとボン研究連絡センターの活動に貢献できるのに、との思いが募ります。公私にわたりお世話になった皆様に、御礼申し上げます。ありがとうございました。

欧州、と一括りに捉えることは非常に難しい、と改めて考えた1年でもありました。その一方、研究活動が簡単に国を超えていく様を、当地において肌で感じることができました。

今後は2年間の国際学術交流研修で得た知識や経験を糧に、業務に取り組んでいきたいと思えます。

産業技術総合研究所 田畑 千恵子



(上) ボンの桜並木



(右) ベートーヴェン信号

2018年4月から1年間、ボン研究連絡センターで学術交流に関する様々な業務に携わらせていただきました。主催イベントの運営をはじめ、初めて経験する業務が多くあり、その中でたくさんの方々にお世話になりました。

今回は初めての海外生活だったため、日常生活でもわからないことばかりでした。ようやく現地に慣れてきた今になって、1年の海外研修は短いという意味が理解できます。一方で、日本での生活や、家族・友人が恋しく、帰国するのが待ち遠しくもあります。

2年間の研修を終え、2019年4月1日からは筑波大学へ戻ります。今後も、大学内外で様々な業務を経験してみたいと思っています。

筑波大学 菊池 南



(上) ライン川沿いに建つ古城



(右) ボンの家の近所のカフェにて

4月からの国際協力員紹介

4月から、東京大学から宇美国際協力員、広島大学から渡邊国際協力員が新たに着任します。

新体制となったボンセンターを今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

ドイツ学術ニュース

ワイリー社と DEAL プロジェクトがパートナーシップを締結

ワイリー社と DEAL プロジェクトは、ドイツにとって画期的なパートナーシップを締結した。本パートナーシップは、新たな出版モデルを試験的に導入すること、研究者がワイリー社のジャーナルを通じてより知識を構築・普及できるようにすること、DEAL プロジェクト参加機関がワイリー社の学術ジャーナル・ポートフォリオへ今後もアクセスできるようにすることを目的としている。

1 月 15 日（火）、研究と教育におけるグローバル・リーダーであるワイリー社は、ドイツの約 700 学術機関を代表する DEAL プロジェクトと、ドイツ全国規模のパートナーシップ契約を発表した。この革新的な 3 年間の契約により、DEAL プロジェクトが 1 年ごとに年会費を支払うことで、すべての参加機関がワイリー社のジャーナルを 1997 年まで遡って閲覧すること、参加機関の研究者が同社のジャーナルへオープンアクセスで投稿することが可能となる。本パートナーシップは、オープンサイエンスの推進、学術的発見の推進、知識の構築と普及において、ドイツの学術機関と研究者をさらに支えるだろう。

学術研究全体の発展を支援するため、ワイリー社と DEAL プロジェクトは、パートナーシップの一環として 3 つのイニシアティブを立ち上げる。まず、フラッグシップとなる新たなオープンアクセスジャーナルの創刊である。この学際的ジャーナルは、グローバルな研究コミュニティの最上層による学識を公開し、新たなオープンアクセス・モデル開発のための独自のフォーラムを提供するだろう。次に、出版への新たなアプローチを導入・促進することを目的とした、オープンサイエンスのための著者向けサービス開発グループの設置である。最後に、ドイツの若手研究者を対象とし、研究コミュニケーションの未来に関する最先端のアイデアを浮上させることを目的とした、新たな年次シンポジウムの開催を予定している。

ワイリー社の Judy Verses 副社長は次のように述べている。

「ワイリー社は、DEAL プロジェクトとのこの重要なパートナーシップを締結することに興奮している。このパートナーシップおよびその一環のプロジェクトは、研究コミュニティへのワイリー社のコミットメントを反映している。学術研究の推進や、知識構築の促進が広範囲で継続的な良い影響を社会にもたらすという考えを、ワイリー社と研究コミュニティは共有している。ワイリー社と DEAL プロジェクトは共に、知識が構築され、よりオープンに共有される仕組みを改善し、リードしていくために協力し合えると考えている。」

HRK 前会長であり、DEAL プロジェクト運営委員会の議長でもある、DEAL プロジェクトの Horst Hippler 代表は、次のように述べた。

「今回の合意により、金字塔を打ち立てた。私たちは、公正な価格のモデルという核心的な目標を達成した。これにより、我々は財政的に持続可能なやり方で、研究をアクセス可能にした。オープンアクセス出版への道をワイリー社とともに歩むことは、革新的である。最終契約の署名にあたり、マックス・プランク協会の協力に感謝したい。」

DEAL プロジェクトとワイリー社との契約のために、DEAL プロジェクトを支援するドイツ学術機関連盟のマックス・プランク協会は Max Planck Digital Library Services 株式会社を設立した。マックス・プランク協会の Martin Stratmann 会長は、次のように述べた。

「DEAL プロジェクトを支援するドイツ学術機関連盟からの要請を受けて、ワイリー社とのドイツ全国的な契約をまとめ、実行に移すことができ、私たちは嬉しく思う。これは、マックス・プランク協会が、学術雑誌へのオープンアクセス促進、新たな学術出版方法への投資、研究者の学術記事の著作権を守るために長年実施してきた、OA2020 のような取り組みに一致している。」

HRK: <https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/wiley-and-projekt-deal-partner-to-enhance-the-future-of-scholarly-research-and-publishing-in-germany/>
(2019 年 1 月 15 日)



ドイツ連邦教育研究省（BMBF）、DAAD のプログラムを通じて教員養成課程の国際化を推進

ドイツの経済ネットワークは世界規模、通貨は欧州規模、しかし、教員養成は国内規模である。ドイツ連邦教育研究省（Bundesministerium für Bildung und Forschung: BMBF）は、教員養成課程の国際化を推進している。教員候補の学生はもっと国際的かつ異文化間の経験を積むべきである。このために、大学は、例えば外国の提携大学との協力を深めることによって、教員養成課程をより国際化することができるはずである。これらは、ドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst: DAAD）の新しい国際教員養成プログラム「Programm Lehramt.International」の目標である。BMBF はこのプログラムに 4 年間資金提供を行う。今後、学生および大学はこのプログラムへ個々に申請することが可能となる。これまでのところ、教員養成課程の学生は他の分野の学生と比較して、外国での経験が少ない。留学がカリキュラムの一部に組み込まれていないことも多い。留学中の学業成績は、多くの場合単位認定されない。DAAD のデータによると、英語・フランス語・スペイン語の若手教員のうち、3 人に 1 人は留学経験がなかった。

今日、ドイツの学校は国際的・文化的な多様性を有する場所である。教員候補の学生の中核的任務は、若者が批判的に考え、行動できるように教育していくことであるが、同時に国際人として、また責任ある態度を持たせるようにしなければならない。国際的かつ異文化間の知識と経験は、現在ますます多様化する生徒たちのクラスを担当する教員にとって、非常に重要である。しかし、これまでのところ、教員養成課程で国際化が進んでいるケースは非常に限られており、学生の中でも、特に小学校教員養成課程の学生における流動性は比較的低い。実務、科学、政治からのビジネス・パートナーとともに、BMBF と DAAD は、教員候補の学生がドイツの学校で国際的・文化的多様性に柔軟に対処できるようにしたいと考えている。今回のプログラムは、ドイツの教員養成課程の国際的な位置付けと認知度を向上させること、大学単独の法的枠組みの中での体系的な教員養成課程の国際化に寄与することを目的としている。

BMBF:

<https://www.bmbf.de/de/lehrer-weltlaeufig-7848.html>

（2019 年 2 月 8 日）

英国の合意なき EU 離脱に備え、教育・研究に必要な準備を

2019 年 2 月 14 日、英国議会下院における今後の EU 離脱手続きに関する決定は、今後のいっそう不透明な状況をもたらした。合意なき離脱、いわゆる「Hard Brexit」は未だ回避されていない。中心的な目標は、依然として、移行期間を含む離脱協定に基づいた、英国の秩序ある離脱である。3 月 29 日の離脱日は近づいており、残された時間はますます少なくなっている。

Anja Karliczek 大臣は、「誰も英国の合意なき離脱を望んでいない。それでも、私たちは緊急事態にも備えている。特に教育、科学、研究は、国境を越えた協力に負うところが多い。」と述べた。英国とは多様な面での協力があり、特に成功を収めている。

ドイツ連邦政府は、英国の秩序ある離脱を求めている。しかし同時に、他の EU 加盟国および欧州委員会と共に、合意なき離脱の可能性に向けた慎重な準備を進めている。これは、そのような状況によりもたらされる可能性のある、深刻な混乱を和らげるのに役立つような対策である。

よく知られた「エラスムス（European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）・プラス（Erasmus

+）」プログラムについて、Anja Karliczek 大臣は次のように述べた。

「英国は、ドイツからの学生および職業研修生にとって、とりわけ人気のある Erasmus + の留学先である。だからこそ、欧州委員会がこのプログラムの特定の分野に対する一時的な資金援助を提案したのは、正しいことであり重要である。財政の緊急事態のために、学業が中断されてはならない。

EU 枠組プログラムである Horizon 2020 と Erasmus + について、たとえ合意なき離脱となった場合でも、英国のパートナー機関と始めたプロジェクトが、限られた期間、確実に継続されることを保証するために、移行解決策に関する欧州委員会の提案が役立つことを願っている。」

ドイツ国家レベルでは、連邦奨学金法

（Bundesausbildungsförderungsgesetz : BaföG）が教育分野における移行規制を規定している。英国の EU 離脱の影響を受けた職業研修生を移行期間中保護することを目的としており、離脱前に研修期間を開始した者は、研修期間の終了まで BaföG の下で給付を受けることができる。

BMBF:

<https://www.bmbf.de/de/harter-brexit-erfordert-vorsorge-fuer-bildung-und-forschung-7902.html>（2019 年 2 月 14 日）

10 人の研究者が若手研究者のためのドイツの最も重要な賞を受賞

DFG と BMBF がハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞を

2019 年 5 月 28 日ベルリンの授賞式で授与予定

2019 年は、10 名の研究者（女性 3 名、男性 7 名）が、ドイツの若手研究者にとって最も重要な賞であるハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞を受賞することとなった。ドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft : DFG）、ドイツ連邦教育研究省（BMBF）によって任命された選考委員からなる選考委員会がボンで開かれ、そこで選出されたものである。5 月 28 日にベルリンで行われる授賞式で、受賞者にはそれぞれ 20,000 ユーロの賞金が贈呈される。

2019 年ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞受賞者は下記の通り。

- Stefan Cihan Aykut、社会学、ハンブルク大学（Universität Hamburg）
- Karl Bringmann、理論計算機科学、マックス・プランク研究所（Max Planck Institute for Informatics, Saarbrücken）
- Fabian Dielmann、無機分子化学、ヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学（University of Münster）
- Jonathan F. Donges、統計力学・気候研究、ポツダム気候影響研究所（Potsdam Institute for Climate Impact Research : PIK）
- Knut Drescher、微生物学・生物物理学、マックス・プランク研究所（Max Planck Institute for Terrestrial Microbiology, Marburg）
- Stefanie Gänger、近現代史、ケルン大学（University of Cologne）
- Nicolas Perkowski、確率論、マックス・プランク研究所（Max Planck Institute for Mathematics in the Sciences, Leipzig）、フンボルト大学ベルリン（Humboldt University of Berlin）

- Uta Reinöhl、一般言語学、ヨハネス・グーテンベルク大学マインツ（Johannes Gutenberg University Mainz）
- Thimoteus Speer、腎臓学、ザールラント大学（Saarland University）
- Nina Henriette Uhlenhaut、実験内分泌学、ミュンヘン・ヘルムホルツセンター（Helmholtz Zentrum München - German Research Center for Environmental Health）

ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞は、研究キャリアの初期段階でテニシアの教授職を持たない、極めて優れた若手研究者を対象として、1977 年以来、毎年授与されている。本賞は、学術の卓越性への道を追求し続けるための評価や動機付けとなっている。また、1980 年からは、原子物理学者であり DFG 元会長であるハインツ・マイヤー＝ライプニッツ氏（在任期間 1973 年～1979 年）の名を冠している。ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞は、ドイツの若手研究者にとって最も重要な賞とされている。

今年の賞には、あらゆる研究分野から合計 129 名の研究者が推薦された。候補者は、数学者でもある Marlis Hochbruck DFG 副会長が議長を務める選考委員会によって決定された。DFG:

http://www.dfg.de/en/service/press/press_releases/2019/press_release_no_04/index.html（2019 年 2 月 27 日）

ドイツ学術ニュースについて

本センターHP では、ドイツ学術ニュースを定期的に更新しています！

最新のニュースや過去の記事の詳細については、こちらをご覧ください。

<https://www.jsps-bonn.de/ja/german-science-news/>



研究及びイノベーションに関する専門家委員会

(EFI) が第 12 回答申書を政府へ提出

Anja Karliczek 大臣：「イノベーションはさらなる持続可能性において重要となる」

連邦政府は、引き続き研究・イノベーション政策を優先事項としており、数多くの新たなイニシアティブによって過去のコミットメントを強化している。このことは、研究・イノベーション・技術能力に関する第 12 回答申書の中で、研究及びイノベーションに関する専門家委員会（Expertenkommission Forschung und Innovation：EFI）によって述べられた。2019 年 2 月 27 日、EFI は第 12 回答申書を Angela Merkel 首相および Anja Karliczek 教育研究担当大臣へ提出した。この答申書は、数あるトピックの中でも、特に持続可能性とデジタル化に焦点を当てている。

連邦政府は、研究・イノベーション政策の核心にデジタル化を据えている。デジタル化は、ハイテク戦略 2025 において、医学や持続可能性、モビリティまで、あらゆる分野で重要な要素である。人工知能（AI）戦略で、連邦政府はドイツおよびヨーロッパを AI 技術の開発と応用のための先導的な場所にすることを目指している。EFI は、連邦政府がデジタル化と AI に高い優先順位を与えていることを歓迎している。EFI は、AI 戦略のさらなる発展のための勧告を行うとともに、ブロックチェーン技術をドイツが有望な立場を持つもう 1 つの将来のトピックであると見なしている。

EFI は、2007 年から連邦政府の政治諮問機関である。研究・イノベーション政策について科学的に妥当な政策提言を示すとともに、毎年進捗状況と活動を明らかにしている。

BMBF:

<https://www.bmbf.de/de/forschung-konsequent-zu-den-menschen-bringen-8007.html>（2019 年 2 月 27 日）

ドイツの冬



ボンで過去最高記録となる 14cm の積雪があった 2019 年 1 月 31 日の様子

4 月にドイツに来てから、「ドイツの良い季節は春と夏」と繰り返し言われてきました。すべての季節が初体験の私は、実際どういことなのだろうと思いつつ過ごしてきました。

11 月頃から、毎日のように天気は曇りか雨。12 月に入ってより気温が下がると、みぞれ・雪・あられが降ることもしばしば。空は分厚い雲に覆われ、日光がほとんど差し込みません。日照不足で鬱になるとはこのことか、と実感しました。

カフェのテラス席では、寒い冬の日コートを着て利用している人を見かけることも。観光での短い滞在ではわからなかった、太陽の光を求めるドイツ人の気持ちが少し理解できた気がします。

菊池国際協力員

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, 53175 Bonn（事務所住所）

Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn（郵便物用）

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jspd-bonn.de

